

癌よ妻を返せ



愛と死のはざままで

長谷川 仁

癌よ妻を返せ

愛と死のはざまで



ディズニーランドにて（1976年4月25日）

長谷川 仁

癌よ妻を返せ

著 者 長 谷 川 仁
発 行 者 櫻 井 義 晃
発 行 所 廣 濟 堂 出 版
東京都千代田区飯田橋
2-4-3 日吉ビル
電話 03-263-0781(代)
振替 東京 164137番
印 刷 所 廣 濟 堂 印 刷 齋

©1977 長谷川 仁

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

まえがき

妻の峰子が亡くなって今日で満五か月の命日、偶然このまえがきを書いている。三十年の長い間、苦楽を共にし、本当によくつくしてくれた。傷心と悲嘆のどん底から這い上がって、やっと釈尊の説く「生老病死」の悟りに一步一步ふみこみつがある。

この一書はただ単なる妻をしのぶ感傷でもなければ鎮魂の手記でもない。のろうべきガンを徹底的に追究し、目をおおうばかりの患者の苦痛、不治の病とは知りつつも、心を鬼にして偽りの励ましをせねばならぬ肉親の身を削られる思いと治療経過を赤裸々に綴ってみた。

そして筆者と同じようにガンの患者をもつ幾十万の家族の方々に多く読みたいことは、ごく一部をのぞいて、ガンの治療は現代医学では限界があり、ガンの宣告はあくまで死の宣告であって、奇跡はあくまで奇跡、絶対に期待してはならず、厳粛にこれを受け止めるべきだということを直言したい。

そして長い人類の歴史を通じて、あらゆる病魔を駆逐した世界の医学界の叡知が、ガンにむかつて敢然と挑戦し、征圧することを切願している。

この度の出版に際し、従来は絶対に外部には公開しない治療関係のあらゆる資料を提供していた

だいた主治医の岩淵勉博士（佼成病院内科部長）、妻の最後までベストをつくしてくれた小林倫仁医師、本稿の執筆を極力すすめた畏友石井保君（テレビ朝日社長室長）、そして一言の下に出版を快諾された広済堂出版の桜井義晃社長、編集を担当した新婚の夢にひたる黒川たい子さんの各位にあつく謝意を表する。

武蔵野市吉祥寺にて

長谷川 仁

（仁二）

癌よ妻を返せ／目次

第一章 前兆

パパ肩が痛いの……………10

孤独のアメリカ生活……………15

つかめぬ峰子の病状……………34

人生の急勾配……………43

病後苦難の選挙戦……………50

浪人時代……………61

第二章 孤独のロスアンゼルス

アメリカの習性……………82

第三章 奇跡を求めて

暗い予感……………91

はなればなれに……………100

孤独な生活……………107

すぐ帰国せよ……………127

ごめんね、ママ……………144

検査につぐ検査……………156

やっぱりガンだった……………164

奇跡を求めて……………177

ガンは治らぬ……………187

第四章 永遠への旅立ち

じわじわと副作用が……………200

最後の団欒……………207

天国への招待券……………219

峰子いっしょに歌おうよ……………233

第五章 雪の思い出

知らなすぎるガン……………240

雪の思い出……………246

癌
よ
妻
を
返
せ

峰子よ、長い間いろいろと苦勞をかけた。安らかに成仏してくれ。

パパ

第一章 前兆

パパ肩が痛い

ロスアンゼルス空港で

「ママ、ぐずぐずしないで、早く歩けよ」

と、ひよつと振りむくと、

「先に行つてよ、苦しくって……」

と、彼女はか細い声でいうなり、ヘナヘナと、ロスアンゼルス空港の国際線ロビーのベンチに、しゃがみこんでしまった。

蒼白な顔、額に脂汗をにじませて、必死に痛さをこらえているようだった。

「大丈夫かい？」

「自分でも情なくって、すみません」

サングラスをはずして、ハンケチで目頭を押えている。

「ママ、ここに、じっとしていろんだよ。パパが迎えに行つてくるから」

この日のロスアンゼルスは珍しく冷え冷えとした朝だった。長年世話になっている立正佼成会の長沼理事長が、南米に向かう途中、ここへ二時間あまり立ち寄るといふので、迎えに出たのだが、

妻の峰子は義理を欠いてはと無理してついて来たのだ。日記をたどってみると、昭和五十一年の五月の六日のことだった。

羽田空港から親子三人、大勢の友人に見送られてロスアンゼルスに向かったのは、私が五十六回目の誕生日を迎えた四月十三日の夜。

機内で峰子は旅の疲れもあつてか、ぐっすりと眠っていたが、娘の智子は長年の夢にすっかりはしゃいで、後の座席でポケットサイズの米会話の頁をめくっており、パパの顔をみるなり、首をすぼめてニヤツと笑っていた。

一昨年、昨年と二度、グアム島に出かけた折には、久方ぶりの海外の旅に嬉しがっていた峰子が、ハワイに着いても、待合室で生のオレンジジュースを、ちよびちよび飲んで「やっぱり、一味違うわねえ」とつぶやいただけで、何となく元氣なく、いつもの喜んだ時の口癖の「嬉しいわ」とはいわなかった。

健康だった妻だが……

彼女は確かに心身ともに疲れていた。今年の一月十三日に私は台北に赴き、四十六日ぶりに（三月五日）羽田空港で顔を合わせた一瞬、びっくりするくらいやせて、頬がげっそりとこけていた。結婚以来、風呂は必ず一緒に入って、背中を流し合いながらその日の出来事や四方山話をする二人だったが、ふくよかだった彼女の乳房はたれ下がり、両脚の細くなったこと、腰の肉もこけて、

今までは、いつも「デブ」「デブ」とよんでいたのが嘘のようにやつれていた。

結婚以来、彼女は病氣らしい病氣はしたことがない。大手術といえ、いま二十四歳になる智子を四谷の川添病院で生んだ時は大変だったらしい。私は当時はサンケイ新聞の台北支局長で単身赴任していた。電報で「一男一女が生まれた」と知らされ、間もなく「男の子は十八時間後に死んだが、母娘ともに元氣、安心せよ」の第二報でホッと胸をなで下ろした。

なんでも手術に四時間半もかかって、本人も相当痛い目にあっただけ。その後、院長から子供はもう生まれないと告げられた。

それ以外は、香港での約四年半の海外生活もふくめて、彼女は健康そのものだった。しかし、年のせいかここ二、三年来便秘と肩こりに加えて、月に一、二度ひどい偏頭痛に悩むようになっていた。便秘のほうは市販の薬がさっぱり効かず、知人のすすめる漢方薬をつづけていた。

昨年の晩秋の頃か、大塚の料亭の女将がとても評判の薬があるというので、それをかれこれ二、三十本つづけて飲んだところ、今度は逆に激しい下痢症状が止まらなくなり、それきり止めてしまった。

一方、肩こりは、週に一度きまって木曜日、スポーツ・マッサージ師の原さんに、泊まりがけで来てもらっていた。正直いって私にはあまり効かなかったが、彼女は毎週この日のマッサージが楽しみのようだった。

マスコミから政界に入って十二年、政治家という稼業はたとえ落選していても結構忙しい。中で

も冠婚葬祭は目がはなせない。若い頃の彼女は毎日の朝夕刊は、石川達三や川口松太郎、舟橋聖一氏らの連載小説を真つ先に読んでいた。だが私が参議院議員になってからは、新聞は必ず社会面の死亡記事に真つ先に目を通していた。先輩、知人の場合は、すぐ秘書に弔電、花輪、香典の用意を命じた。タンスの中には結婚式用と喪服とをいつもきちんと揃えていた。参議院の全国区となるとマンモス選挙区なので、一年中、年始、御中元、御歳暮に追われているようなものである。

その上に、私が長い海外生活を通じて知り合った中国人、韓国人、香港華僑、あるいは米国人などとの付き合いが多く、これら友人が来る度に接待、お土産の用意に気をくばらなければならない。しかも、相手が、サラリーマンクラスの人ならば気楽に用立てできるものの、知名人であったり、財閥だったりすると、一日中三越、高島屋、伊勢丹などとデパートをぐるぐるかけ回る。クタクタになって帰宅すると、決まって激しい頭痛に襲われるのだ。深夜、幾度となく近所の医者への往診を願った。杉並の和田本町に住んでいる頃は、産婦人科の布施医師にずい分ど厄介になったものだ。妻が亡くなって初七日の日だったが、その布施医師が来られたので、そうした場合にどんな措置

をされたかと端的にきいてみた。カルテの最後は昭和五十年の六月三日。いつも頭痛を起こした時の血圧は一八〇—一〇〇前後、すぐに脳の血管を拡張するパペリンを注射し、血圧下降の飲み薬を四日分渡して、体調の変化には自分で注意するようにすすめていた、という話だった。

もともと医者と注射は大嫌いだった。吉祥寺に移ってから（昭和四十八年一月）、時折り、発作と起こすので、「一度ゆっくり人間ドックに入ったら？」とすすめたが、彼女は笑いながら「ダイ

ジョウビ……」と逃げ、「それよりパパこそ氣をつけなさいよ。いつも怒鳴ってばかりいると、今に舌ガンにかかるわよ」とうけつけなかった。

夜ふかしで、朝寝坊だったのは、今にしてみると血圧と関係があったのかもしれない。神経質で薬の好きな私をいつもからかい、ハリだけは効くのか、せっせと通っていたようだった。

三つ年上の姉さん女房だったので、ふだんは叱られっ放しだった。しかし、今考えても妙だが、彼女がへばってねている時だけは、宴会の約束があつても断わり、氷まくらをしてやつたり、タオルをしぼったりしていたわってやつた。だから峰子に「パパは病氣になると親切ねえ」と皮肉られたが、仕方なくいやいやの看病ではなく、本心だった。

というのは、その発作が起きると、七転八倒、ベッドからころげ落ちることもあつて、見ていただけではどうにもならず、医師の注射で一、二時間眠るとやっと落ちつくような悪性だったのだ。そうしたことがある度に「一度、精密検査を受けてみたら」とすすめたが、別に食欲が落ちるのでもなければ、体重が減るでもなく、平均六十五キロ前後だった。だから無理矢理病院に連れていくこともしないままに、時を過ごしてしまつたのである。

峰子がJALの特設ベッドで、智子と帰国したのが六月七日。このロスアンゼルスでの三十四日間は、実に辛くわびしい日々であり、そして彼女にとっての最後の海外旅行となるとは到底考えも及ばなかったのである。